

CSR REPORT 2019 に対する第三者意見

2018年は北海道にとって試練の年でした。9月に発生した北海道胆振東部地震では多くの被害者が出ましたが、北海道全域に与えた経済的影響も大きく、北海道を取り巻くネガティブな外部環境に追い打ちをかけました。このような厳しい状況の中、地域を代表する金融機関として、直接にはお見舞金の寄付、間接的には北洋災害復興応援債を通じた金融支援など、臨機応変な地域社会への貢献活動をいただきました。一道民として心より感謝申し上げますとともに、「道民の持続的発展に資する行動」という北洋銀行グループのCSR基本方針の具現化を目の当たりにし、改めて道民としての信頼感を再構築

しているところです。今後とも地域と作る持続的な共有価値とは何かを模索していただき、身近で頼れる組織の模範であり続けていただきたいと思います。

2018年の自然災害は北海道にとって大きな試練でしたが、北洋銀行グループのCSRにとっては大きな飛躍の年となりました。具体的には2018年12月の「北洋銀行SDGs宣言」に集約しています。役職員一同の熱い思いとともに、本CSR REPORT 2019でもその新しい顔を見ることが出来ます。その取り組みの詳細を読者の皆さんと一緒に概観したいと思います。

● CSRとSDGs

CSRは社会貢献活動。ESGは環境・社会・ガバナンスの英語頭文字。企業の持続的発展や投資に重要な三大要素といわれています。SDGsは持続的開発目標。2015年国連サミットで採択された持続的社会を実現するための具体的目標で、日本政府から企業まで一丸となって推進しています。CSR、ESG、SDGsとアルファベット省略記号が入り乱れるこれらの概念は重なり合い、混乱しているようにも見えます。この三者の関係は一体どうなっているのでしょうか。

本レポートの3～4頁では、北洋銀行グループが考える三者関係がまとめられています。従来行われてきたCSR活動の目標が、ESGやSDGsの掲げる「持続的社会の実現」として再編され、目標とされることが語られています。実は、SDGs宣言は経営的に難しく、道内の実現可能企業はほぼ皆無というのが実態です。SDGs宣言は全役職員がステークホルダーに誓った約束です。だからこそこの約束は北海道の宝であり、道民の誇りともなりえるのです。

● SDGs 経営のその先に

SDGs経営を目指すため、北洋銀行グループのCSRは再編されました。「環境保全」「医療福祉」「教育文化」という三大領域で整理されていたCSRは、本年より「お客さまとの共通価値の創造」「環境保全」「医療福祉」「教育文化」「ダイバーシティ」という5大領域に再編され、対応する17のSDGs領域のマークが付けられています。CSRの相貌はSDGsへとシフトし、移行することとなりました。SDGs経営を目指す以上、一点だけ注意しなければならないポイントがあります。SDGsは単なる願望ではなく、具体的な詳細目標があり、その達成度を測る指標も用意

されています。だからこそ実践者の責任と能力が求められているのです。今後、この実践成果をどのように本CSR REPORTで語っていくか、道民一同、期待しながら待っています。

北洋グループのSDGsは、全役職員一丸となり、マネジメント評価と共に、確実な成果を上げることでしょう。成果の果てにあるものは北洋銀行グループのビジョンの実現に他なりません。そんな光輝く北海道の未来を、一道民としても応援し続けたいと思います。



北海道大学
メディア・コミュニケーション研究院
国際広報論分野・教授

伊藤 直哉

筆者略歴

カトリック・ルーヴァン大学(ベルギー)大学院博士課程修了。同大学高等哲学社会研究所研究員、北海道大学言語文化部助教授、北海道大学大学院国際広報メディア研究科助教授を経て、2009年より現職。主な研究領域は国際広報マーケティング論、観光情報学等。社会連携として、北海道CSR研究会の活動を積極的に展開し、企業との連携実績が豊富にある。